

「いのち」の輝き—— 目次

プロローグ……………1

第一部 「いのち」と日本人

1. 「いのち」に目覚めると生き方が変わる……………8
2. 日本列島という特異な風土……………17
3. 縄文文化こそ日本のルーツ……………27
4. 「いのち」と「かたち」と「たましい」……………57

第二部 「いのち」を輝かせて生きた人たち

一・天智修羅——宮澤賢治の幻視力

1. 異彩を放つ岩手の人……………80
2. 生まれながらの天才……………85
3. 思いやり深い教師……………91

4. たぐいまれな感性……………95
  5. 「幻視力」の持ち主……………100
  6. 幻視からの創造……………106
- 二・没我献身——ヘレン・ケラーが信じた教え
  1. 暗闇からの脱出……………112
  2. 心に刻んだ日本人……………119
  3. ヘレンを支えたもの……………127
- 三・野鳥開眼——中西悟堂の野生
  1. 荒行で生まれ変わった少年……………142
  2. 野鳥と暮らして……………151
  3. 「いのち」とのコミュニケーション……………155
- 四・人間未知——アレキシス・カレルの慧眼
  1. 人類の恩人……………165
  2. 「ルルドの奇跡」を目撃する……………170
  3. 人間不在の近代文明……………178

## 第三部 四季の「いのち」に触れて

- 一・春の記……………188
- 二・夏の記……………205
- 三・秋の記……………230
- 四・冬の記……………252
- 五・桜の記……………271
- ① 桜に憑かれた人たち……………271
- ② ソメイヨシノが起こした「桜革命」……………278
- ③ 桜こぼれ話……………285

エピローグ……………294

## プロローグ

個に居りて個にとどまらず天地あめつちにみちみなぎれる我が命はや

この短歌は、倫理運動を創始した丸山敏雄（一八九二～一九五二）の歌集『天地あめつち』に載る一首です。

あるときこの歌を目にして、なんとも言えない感慨を覚えました。末尾の「はや」は感動・詠嘆を表す言葉です。それと同様の、「ああ、そうだな」という思いがこみ上げました。この歌では「命」の語の前に「我が」とあります。そのことに得心しました。というのは、大和言葉の「いのち」が、漢字では「生命」とか「命」と書かれ、同じように使われることに抵抗感を覚えてきたからです。

「いのち」は個の生命（命）の奥に広がって、天地に満ちみなぎっている生命の根元を指している。だから「個に居りて個にとどまらず」なのだ。——そう得心したことから、『いのちといやし——激変の時代をたくましく生きる』という本を書いて、平成十二（二〇〇〇）年に新世書房から刊行しました。また「いのち」をタイトルに入れた本としては

もう一冊、出産をテーマにした『いのち』とつながる喜び』を書いて、二〇〇七年に講談社から刊行しました。ここに新たに上梓する『いのち』の輝き』と題する本は、それから前二作の続編と考えています。

前提となるのは「いのち」と生命(命)とを、はっきり使い分けること。「生きている」のは生物だけでなく、地球をはじめ、この世のあらゆる存在が生きていると考えられるからです。

生命は個々の存在物に内在している「いのち」であり、「いのち」は個体の生命を含み超えた全体であって、生命の根元にほかなりません。それを倫理研究所の第二代理事長だった丸山竹秋は「元基」(あるいは「生基」とも呼びました。

「いのち」の意味については、あとでまた解説します。本書のタイトルに入れたもう一つの「輝き」についても触れておきましょう。

輝く(耀く)とは、まぶしいほど光が四方に発していることを意味します。同じく光の様子には「照る」という言い方もあります。これはもつと強い光り方です。天照大神はそういう強い光の化身の神ですから、岩戸の中に隠れてしまうと、世の中は真っ暗闇になったと神話が伝えています。

光の様子を形容した言葉に「きらきら」があります。「きらきら輝く」とは言うけれども、「きらきら照る」とは言いません。差し込む光がきらきらと見えるのは、そこに光だけでなく影（陰）もあるからです。光と影とが細かなバイブレーションで交錯している状態、それが輝いていることといえましょう。

この影の存在に着目すると、輝くことの意味に味わい深さが感じられます。「いのち」そのものは目に見えませんが、光も影（あるいは闇）もそこには含み込まれていて、個々の生命として輝きを発する。そこに影もあるからこそ、きらきらと美しく輝くことができ。動物も植物も、水の流れも、山も岩も、そして人も……。

そのような「いのち」の輝きについて、本書では「日本」「偉人」「自然」をテーマにした三部構成で綴っていきます。読んでくださる方々の生命が、「いのち」の発動としていよいよ輝くことを願いながら。

平成二十八年一月

著者